

蜷川実花さん(蜷川実花展・展示室にて)



巻頭言

溶解する境界線―蜷川実花展

私たちの美術館では、今まで幾度か「境界線(ボーダー)」や「自分と世界をつなぐ距離(ディスタンス)」といったテーマの展覧会を企画してきました。境界線(ボーダー)は交流やエネルギーを生み出す場所となり、国境であれば紛争の地ともなります。紙や画布に一本の筆で描かれた線であれば、それは物の存在を示す輪郭となり、内と外、上下左右を区分する境目ともなります。ボーダーは彼岸と此岸の狭間であり、幻想と現実の境界線でもあり、実に多様で根源的なテーマとなります。ボーダーあるいは境界は、それを超えたり、往還したりすることにより、ダイナミズムが増し、テーマ性はさらに深まります。

また本年度に実現した演劇と映像が合体した稀有の企画「渚・暎・カーテン チェルフィツチュの〈映像演劇〉」では、境界のありようがテーマの主軸となり、正にタイトルが示すように、渚は、その向こうが海で、手前は陸地の境界線でもあります。そしてまぶたは内面と外界を仕切るものであり、そのラインを越境したり、むこうからそれを超えて侵入しても来るのです。

ところで今回、全国巡回展の立ち上がりとなる「蜷川実花展―虚構と現実の間に―」では、その境界や作家と対象物との距離は曖昧となり、境界線は溶解し、昼と夜、明と暗、フィクションと現実が混然とし、表裏一体となります。蜷川実花の表現は、生きている花や造花の花々を撮ろうとも、あるいは運動選手や舞妓や俳優等、様々な人物を捉えようとも、躍動感に満ち豪華絢爛でありました。展示作品数も圧倒的で、その色彩世界は観客の全身が取り込まれるようなイマーシブなインスタレーションとなりました。会場を訪れる観客は、女性を主体として子供から高齢者まで、とりわけベビーカーを押して観覧する多くの母親の姿が印象的でした。今回の展覧会は、蜷川実花の驚くべき力量と先進性を示す展覧会に仕上がっていました。

熊本市現代美術館館長 桜井武

Contemporary Art Museum, Kumamoto

NEXT EXHIBITION

2019.3.20[土]—3.31[日]

第30回熊本市市民美術展 熊本アートパレード

CAMK
www.camk.jp

MUSEUM INFORMATION

2018MAR-SEP

渚・暎・カーテン チェルフィツチュの(映像演劇)

2018.4.28-6.17

渚・暎・カーテン チェルフィツチュの(映像演劇)

演劇作家である岡田利規さん(チェルフィツチュ主宰)が境界のありようをテーマにつくる6本の(映像演劇)によって構成される演劇公演／展覧会。

(映像演劇)とは、岡田さんが舞台映像デザイナーの山田晋平さんともに取り組み始めた新しい形式の演劇であり、投影された映像が人の感覚に引き起こす作用によって展示空間

間を上演空間へと変容させる試みです。映像はフィクションであり、実在してはいませんが、同時に、役者によって演じられる人物たちは、映像として実在しているのだとも言えます。観る者の想像力と結びついてそれらにリアリティが付与されたとき、展示空間に(映像演劇)という上演が発生するのです。

この演劇公演／展覧会のタイトル「渚・暎・カーテン」は境界の、線や壁といった頑ななものとは異なる柔らかくて曖昧なありようについて想像するための、ヒントになるかもしれません。3つの単語を並べたものですが、それ自体が「映像」と「演劇」という二つの異なる形式の双方にまたがりつつ新しい質をもった経験を生みだそうとする試みである(映像演劇)の観客は、展覧会会場という現実の場所と(映像演劇)によって生み出されるフィクションという二つの領域を同時に経験することになりました。

内覧会には、山田さん、会場構成に携わった長坂常さん(スキーマ建築計画)、作品に出演している青柳



いたポイントでは「心の内から湧き出てくる感情だけで作られたものではない」と

いうことだったとのこと。山田さんが3月まで教鞭を執っていた大学は、地域研究に基づいて制作を行うというユニークなところだったそうです。そういった背景もあり、このアートパレードの審査においても、自分



づみさん、安藤真理さん、太田信吾さん、大村わたるさん、川崎麻里子さん、塚原悠也さん(contact Gonzo)など、本企画に関わる多くの関係者が集い、世界初演／初公開を迎えました。(M・I)

で足を運んで見たもの・聞いたことをもとに制作されている作品に目が留まりやすかったとのことでした。

質問コーナーをはさんだあとは、山田さんの肩書きにある「ニッポン画」とは何なのかというお話や、昨年11月から今年2月まで島田美術館で開催されていた展覧会「おもかげものがたり」に出品された新作「熊本のがたりの屏風」シリーズの制作の裏話などをお話しいただきました。(A・S)

【参加人数30人】



2018.4.28

オープニングトーク

初日、本企画に関わった岡田利規さん、山田晋平さん、長坂常さんによるオープニングトークを開催しました。

まず岡田さんから、なぜ(映像演劇)をつくりようと思ったのか、演劇

と(映像演劇)との違いについて触れながら話がありました。山田さんは、舞台映像デザイナーとして演劇の舞台美術に関わってきた経験をふまえて、(映像演劇)では何ができるのか、投影する素材、その物質性について、新たなアイデアを生み出すに至った思考を具体的に紹介。このような(映像演劇)の試行錯誤のプロセスについて、岡田さんは100年以上前に映画が発明されたときのことを引き合いに出し、何を映せばお

もしろいのか、どのような撮り方をすればいいのかといったことを、つくりながら考えていった自分たちの状況を振り返りました。また、「フィクション」の成立について、スクリーンの中で完結する映画と、空間によって頭と心のズレが生じる(映像演劇)の違いといった話も深まりました。

実験や試写の段階から本企画に参加していた建築家の長坂さんは、かつてチェルフィツチュの演劇作品を観たときに自身が受けた衝撃について、エピソードを紹介。そのときに感じた、演劇空間で起こっているフィクションを現実空間に持ち運ぶという感覚を意識して、今回の会場構成をつくりあげたそうです。



【参加人数74人】

第29回熊本市民美術展 熊本アートパレード

2018.3.31

山本太郎審査員講演会

第29回熊本アートパレードの審査員で、ニッポン画家の山本太郎さんによる講演会を開催しました。前半は今回の入選作品を1点1点スライドに映しながら講評され、後半はご自身の制作のを中心にお話しいただきました。

今回、審査を行う上で重要視して

アフタートーク(3回開催)

〈映像演劇〉とは一体何なのか? 誰かと一緒に作品を観てみることで、チェルフィッチュの新たな演劇について話してみようという企画を開催しました。毎回、熊本市内在住や出身の方をゲストにお招きして一緒に鑑賞しました。

1回目のゲストは早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系で学んでいる小田崇仁さんと熊本県立劇場の嶺浩子さん。この回には、小田さんが熊本高校時代に企画したトークシリーズのゲスト、岡田利規さんと伊藤比呂美さんの二人も飛び入り参加。久々の再会とともに、様々な批評や質問が繰り返されました。2回目は古本屋を営む菅原龍人さん。



菅原さんの視点で〈映像演劇〉の演劇性について語られました。3人目は洋服屋でディレクターをされている石原眞弓さん。熊本での演劇イベントの運営などにも携わる演劇好きの石原さんは、チェルフィッチュに関して「好き」というより、心に強く訴えかけてくるという話もありました。

三者とも取り上げるポイントや語り方は少しずつ異なりましたが、作品の内容や理解については近い話も多く、〈映像演劇〉が示唆することをより深める機会になりました。また、企画者によるツアーとは異なる形でのトークを開催することで、より自分たちが観ることを意識した鑑賞体験ができました。(M・I)

- ①小田崇仁(早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系)、嶺浩子(熊本県立劇場) 【参加人数18人】
- ②菅原龍人(古本タケシマ文庫店主) 【参加人数8人】
- ③石原眞弓(熊本の洋服屋P.C.ディレクター) 【参加人数14人】

2018.5.5&5.27

タネあかしツアー(2回開催)

〈映像演劇〉の不思議な体験の謎を解き明かすタネあかしツアーを行いました。

今回、出品されている〈映像演劇〉は、舞台映像デザイナーの山田晋平さんが、ドアやハーフミラーなどを投影する物の素材や形を提案し、「どのように見えるのか?」ということについて、岡田利規さんとともに考えながらつくられていきました。その起点を踏まえ、タネあかしツアー

「上映プログラム」

チェルフィッチュ演劇作品の特別上映時間・各回18時より 場所・ホームギャラリー

- ①5月5日 『部屋に流れる時間の旅』 2016年初演 上映時間84分 【参加人数22人】
- ②5月19日 『God Bless Baseball』 2015年初演 上映時間106分 【参加人数26人】
- ③6月2日 『スーパープレミアム』 フトWパニラリッチ 2014年初演 上映時間104分 【参加人数33人】
- ④6月16日 『地面と床』 2013年初演 上映時間107分 【参加人数39人】

では、映像展示の仕組みや、どのように撮影を行ったか、私たち観客が映像の役者をそこに実在している人のように見えてしまうのはなぜなのか、といったことについて、〈映像演劇〉における技術と思考のタネあかしを行いました。



《楽屋で台本を読む女》については、普段は通れないプロジェクトの設置スペースである「楽屋裏」も特別に案内しました。

撮影やプロジェクトエグゼクション、そのほか展示における演出について各作品の制作の裏側を紹介することで、〈映像演劇〉の仕組みを少し明らかにしました。(M・I)

【参加人数①12人②11人】

〈映像演劇〉を演じてみよう!

「スマホでつくる〈映像演劇〉」(2回開催)

〈映像演劇〉を実際に制作してみるワークショップを開催しました。

講師は本企画で全作品の映像を手がけている山田晋平さん。今回のワークショップでは、出品作品『Standing on the Stage』と同じスマートフォンを用いたタイプを制作しました。

ワークショップでは、「目が覚めるとベッドの上にいる」という設定。ベッドを起点に自分の部屋の様子について話した後、A4の白い紙の上に自分のスマートフォンを置き、それをベッドに見立てて部屋の隅取りを描いていきました。そして山田さんが用意した穴埋め方式の台本にセリフを書き込みました。台本を読ん



で演じる練習時間を設けた後、一人ずつ撮影。「スマートフォンを水平に机の上に置いて寝ている状態」画面の自分はベッドに寝ている状態であるということイメージしながら、部屋の様子を指し示して演じました。

撮影を終えた人から、部屋を描いた紙の上にスマートフォンを置き、再生して作品を鑑賞しました。最後は全員の作品を並べて一気に再生。それぞれの部屋の住人が話し始め、マンシヨンのような都市感が出て群像劇のようになり、個別で観るのはまた違う上演の形が現れました。

台本の作成から演技、上演までの一連を実際に制作してみることで、〈映像演劇〉において重要な要素となる「見え方」や「見せ方」を学べるワークショップになりました。(M・I)

【参加人数①12人②11人】



ギャラリーⅢ(GⅢ)は、熊本九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです。

GⅢ

2018.5.9-6.10

被災作品公開 コンディションチェック展

GⅢ vol.122
ギャラリーⅢの企画として、熊本地震で被災した当館収蔵作品の公開コンディションチェック展を開催しました。本展は、学芸員による作品のコンディションチェック作業を一般来館者の皆さんに公開で行うことを中心とした企画で、2016年11月に続く第二回の開催となりました。前回同様、今回も多くの方々に関心を寄せていただき、公開作業実施日にはメディアからも多数の取材がありました。収蔵作品の全てを詳細に確認するための作業量は膨大なものであり、現在でも作業はまだその途上にあります。チェック作業は今後も地道に継続していく必要があり、今回のようにその作業を公開する場も定期的に設けていきたいと考えています。(G・S)



2018.6.13-8.12

GⅢ vol.123

「アート・パレード・パレード」展



「熊本市 民美術展 熊本アートパレード」に長年ご出いただいた、多数入賞された14名の作家を特集した名品展「熊本アートパレード」を開催しま

した。会場には、絵画から写真、映像、マラソンの被り物まで個性豊かな40点が並びました。6月16日(土)には出品作家によるトークが行われ、それぞれの作品を前にして、制作に対する思いが語られました。(A・S)

【トーク参加人数20人】

2018.8.15-9.17

GⅢ vol.124

本と人と作品の空間を考える01

「ねじれたライブラリールーム」

本展は、日々どのように本を活用するか考え、試行錯誤する「本と人と作品の空間を考える」シリーズとして企画。1回目は、熊本出身のアーティスト・松延総司さんと提案する小企画展「ねじれたライブラリールーム」です。

松延さんによる「ねじれたライブラリールーム」というタイトル同様、会場内には「ねじれた (twisted)」



輪ゴムの作品が、写真やスライドショー、インスタレーションといった様々なメディアで点在しました。中心には《私の石》を石庭のように展示。

松延さんの作品のほかに、当館のアートワーク(恒久展示作品)を手がけた4人の作家、マリーナ・アラモヴィッチ、ジェームズ・タレル、草間彌生、宮島達男の本も手にとって読めるようにしました。マリーナ・アラモヴィッチによる《Library for Human Use》とジェームズ・タレルによる《MILK RUN SKY 2002》は、当館の中心に位置する図書スペース「ホームギャラリー」に設置されたアートワークです。「ねじれたライブラリールーム」は、「ホームギャラリー」の別な在り方を考える企画。両者を比較しながら過ごしてみることもできかもしれませんが。このほか、図書館や本に関する本なども併せて、約100冊を開架しました。(M・I)

2018.8.18

「ねじれたライブラリールーム」 アーティストトーク& ワークショップ

小企画展「ねじれたライブラリールーム」の出品作家、松延総司さんによるアーティストトーク&ワークショップを開催しました。

導入では「ねこがねころんだ」と「ふとんがふつとんだ」という二つのダジャレを取り上げ、「ふとんがふつとんだ」はインパクトがあり瞬間的な出来事であるのに対し、「ねこがねころんだ」は当たり前の光景がただあるだけという特徴を指摘。松延さんの美術への関心は、「ねこがねころんだ」のように、当たり前のことへの追究や再定義にあるそうです。次に、

松延さんが制作するうえでキーワードとして「線」と「影」について、その「削る」ということや「凹み」といった性質についての話がありました。また作品の主要なモチーフとして用いられている輪ゴムについては、「何でも無いもの」としての興味を話されました(参加者には輪ゴムも配られました)。

このほかに、出品作品を含む松延さんの作品についても個別に紹介がありました。会場構成については、「本と人と作品の空間を考える」というシリーズの企画意図に沿って、大きく二つの対比を考えたそうです。

1 本との対比

「Twisted Rubber Band」(輪ゴムの作品) — 文字

《私の石》(セメント石の作品) — 紙

《鼻歌》 — ストーリー

↓ 展示空間全体を「本」と捉える

2 ホームギャラリーとの対比

「Twisted Rubber Band」(輪ゴムの作品) — 観者、人、身体

《私の石》(セメント石の作品) —

ジェームズ・タレル《MILK RUN SKY 2002》

《鼻歌》 — BGM、ピアノコンサート

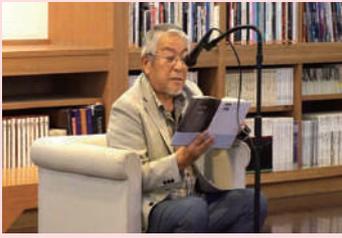
↓ ホームギャラリーへの提案

最後は松延さんの話を受けて質疑応答。特に制作のプロセスに関する質問などがありました。美術に対する意識から作品の意図にいたるまで、深く掘り下げられた作家自身の思考をじっくり聴きながら考えるアーティストトーク&ワークショップとなりました。(M・I) 【参加人数20人】



詩の朗読会

- 2018
- 4.26 第171回「カーテン」【参加人数12人】
- 5.20 第172回「渚」【参加人数12人】
- 6.28 第173回「劇場」【参加人数10人】
- 7.27 第174回「私の色・あなたの色」【参加人数11人】
- 8.23 第175回「金魚」【参加人数10人】



当館ボランティアによる子ども向け読みきかせ

CAMK読みがたり

- 2018
- 4.21 第103回「たのしいおでかけ」【参加人数18人】
- 5.19 第104回「風とはしろう」【参加人数28人】
- 6.16 第105回「ことばであそぼう」【参加人数17人】
- 7.21 第106回「おばけがくるぞ」【参加人数26人】
- 8.18 第107回「夏はまだまだ」【参加人数20人】



親子向けの各種ワークショップ

街なか子育てひろば

- 2018
- 4.19 大津山琢「親子で楽しむおもちゃ作り」
- 5.24 わいわいランド「親子でわくわくリトミック」
- 6.22 松岡宏「リフレッシュ親子ヨガ」
- 7.19 おはなしポット「おはなし会とふれあい遊び」
- 8.23 大津山琢「親子で楽しむおもちゃ作り」



から提示されています。と同時に、美しいものを求めるがゆえの残酷さ、人間の欲望のゆがみといったものも内包しているのが、このシリーズの特徴でもあります。青、ピンク、オレンジの色をしたこれらの花々は、実



蜷川実花《FLOWER ADDICT》2009年 C プリント、プレキシグラス

夏のコレクション展
— 蜷川実花《FLOWER ADDICT》を中心に —
蜷川実花展に合わせ、当館所蔵の蜷川実花の作品《FLOWER ADDICT》を夏のコレクション展の中心としてご紹介しました。《FLOWER ADDICT》は、鮮やかで大胆な色目を引く花の作品で、美しいものに対して抱く私たちの憧れが、真正面

はもとは白い菊の花。色水によって本来とは違う色を纏わされているのです。作家は、華やかさや美しさを捉えると同時に、その背後にある「影」や「闇」についても視線を投じています。そのほか、ミロヴァン・デステイル・マルコヴィッチの《変貌》シリーズ、リュドミラ・ゴルロヴァの《Happyend (Moscow)》、中山ダイスケの《Private Castle》をあわせて展示。作り上げられた「モノ、イメージ、習慣をテーマとした作品をご紹介します。(M・U)

井手宣通記念ギャラリー

2018.8.15 - 10.18

ミュージック・ウェーブ

2018.7.21

STREET ART-PLEX KUMAMOTO
JAZZ OPEN 2018

ジャズの祭典「JAZZ OPEN」が今年も熊本市中心市街地で開催されました。現代美術館会場では2組が出演。スタート時には1000人を超える来場者で賑わい、軽やかな演奏に暑さを忘れるひとときとなりました。豊田隆博 Trio は、これまでも美術館会場で演奏いただいたベテラントリオ。熊本を代表するシンガー藤本直子さんが加わって2ステージにわたる演奏を披露されました。軽快なメロディから愛いのある美しい曲まで、豊田 Trio と藤本さんの成熟した音楽をお楽しみいただきました。Kumamoto Bossa & Jazz Club はボサノヴァの名曲「イパネマの娘」「おいしい水」を披露。様々な楽器の8名で構成される演奏により、会



場は心地よいリズムで満たされました。(Y・M) 【参加人数160名】

文化庁長官表彰受賞記念シンポジウム 「アートがまちと人に できること」



熊本市が平成29年文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を受賞したのを記念し、大西一史熊本市長、桜井武当館館長、モデレーターに（株）ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト

室の大澤寅雄氏を迎えて、シンポジウムを開催しました。

熊本地震の際に「復興中の熊本城をライトアップさせることで、下を向きがちな市民の視線や心を上に向けられればと思った」という市長のお話や、「被災し静まりかえった街なかで、いち早く、美術館を美術館として開ける」ことで、街に明かりを灯せればと考えた」という館長のエピソードは、アートや文化が、市民やまちに対してできることを物語っていました。

また、地震を体験したことで、「今まで『美術なんてわからない、苦手だ』と思っていた自身の感受性が強まり、表現や作者の思いを受け取り、アートや音楽をより求めるようになった」という市長のお話には、アートが人間を癒すと同時に、活性化させる力を持っているということに改めて気づかされました。

その他、20年後の熊本市の姿とし

月曜ロードショー上映報告 上映リスト (4/1~9/9)

- 4月2日 『笑う大天使』 2006年 日本 92分
- 4月9日 『ジェーン・エアー』 1943年 アメリカ 96分
- 4月16日 『稚内発 学び座ソーランの歌が聞こえる』 1998年 日本 103分
- *日本語字幕付き(協力:字幕サークルおむすび)
- 4月23日 『グレート・ディベーター 栄光の教室』 2007年 アメリカ 128分
- 4月30日 『ヨーロッパ』 1991年 デンマーク・フランス・ドイツ・スウェーデン 108分
- 5月7日 『ピナ・バウシユ 夢の教室』 2010年 ドイツ 89分
- 5月14日 『一年の九日』 1961年 旧ソ連 109分
- 5月21日 『万事快調』 1972年 フランス・イタリア 96分
- 5月28日 『夢』 1990年 日本 119分
- 6月4日 『アンナ・マクダレーナ・バッハの年代記』 1968年 西ドイツ・イタリア 94分
- 6月11日 『こねこ』 1997年 ロシア 84分

て、「パワーをもって進むと同時に、さみしさを感ぜずに生きていける街にしたい」というお話もあり、アートや美術館が、その時に果たすことのできる役割を考えさせられたシンポジウムとなりました。(A・S)

【参加人数 110人】



共催イベント

- 2018
- 4.15 「くまもと大邦楽祭 2018」プレイベント … (A)
- 7.22 熊本城ホール開業機運醸成イベント2018 津田大介トークショー「ネット社会の今と、これからのエンターテインメント」
- 5.4-6 上通アートプロジェクトvol.8 上通演劇まつり … (B)
- 6.2 SLOW LABELディレクター栗栖良依氏講演会「福祉と共生社会」 (C)
- 6.3 金井ケイスケ パフォーマンス・ワークショップ in 熊本 … (D)
- 6.10 アジア代表日本2018 マッチフラッグワークショップ in KUMAMOTO … (E)
- 6.15 鯉ヶ浦水曜郵便局 トークセッション「熊本から宮城へー水曜郵便局のその先」 … (F)
- 7.26-8.5 こどもおもしろおばけ屋敷「台所のひみつ」



A



D



B



E



C



F

- 6月18日 『小さな目撃者』 1970年 イギリス 89分
- 6月25日 『見知らぬ医師』 2013年 アルゼンチン・フランス・スペイン・ノルウェー 92分
- 7月2日 『恋はハッケヨイ!』 2000年 イギリス 94分
- 7月9日 『オフサイド・ガールズ』 2006年 イラン 92分
- 7月16日 『サミュエル・L・ジャクソン in ザ・キャンプ 伝説のファイター』 2007年 アメリカ 112分
- 7月23日 『燃えよドラゴン』 1973年 香港・アメリカ 100分
- 7月30日 『マッハ!』 2003年 タイ 108分
- 8月6日 『サマーズ・テイル』 夏のしつぽ』 2007年 台湾 99分
- 8月13日 『父と暮せば』 2004年 日本 99分 *日本語字幕つき
- 【特集】カレル・ゼマン
- 8月20日 『悪魔の発明』 1958年 チェコスロバキア 83分
- 8月27日 『ぼら男爵の冒険』 1962年 チェコスロバキア 85分
- 9月3日 『カメジロー』 沖繩の青春』 1998年 日本 84分

次回も88-89号の合併号でお届けします、お楽しみに!



編集後記

今回のAKLは合併号という形で、2018年度の上半期の活動をまとめてお届けしました。今年度の熊本市現代美術館はチェルフィッチュ展に始まり、挑戦的な企画やパワフルな企画が目白押しで、県内外で多くの注目を集めました。その一端をAKLで改めて振り返っていただければ幸いです。下半期を振り返る次回号もほどなく発行の予定です、そちらもどうぞご期待ください!

編集長 佐々木玄太郎

今号から編集を担当することになりました。これからどうぞよろしくお願いたします。

2018年度の夏に開催された「蜷川実花一虚構と現実の間にー」展。夏休みも重なっていたこともあり、老若男女問わず、たくさんのお客様がご来場くださいました。私も会場内を一周したとき、幾つになっても心のどこかでワクワクしてしまう夏の風情を、より一層意識してしまうような、そんな色彩鮮やかな数々の作品に魅了されました。今後も様々な展覧会などを通じて、感動やわくわくする気持ちを市民のみならずと共有できれば嬉しいです。

担当 紫垣美帆

[執筆者一覧] *原稿の文末にイニシャル表記

- 富澤治子 (H・T) [熊本市現代美術館主査・学芸員]
- 坂本顕子 (A・S) [熊本市現代美術館主査・学芸員]
- 佐々木玄太郎 (G・S) [熊本市現代美術館学芸員]
- 池澤茉莉 (M・I) [熊本市現代美術館学芸員]
- 岩崎美千子 (Mi・I) [熊本市現代美術館学芸員]
- 丸吉ゆかり (Y・M) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
- 三浦和紗 (K・M) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]
- 手嶋彩香 (A・T) [熊本市現代美術館学芸アシスタント]

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.86-87 新春号 (2019年3月) 【無料】

発行人: 桜井武

編集: 佐々木玄太郎 紫垣美帆

デザイン: 石井克昌 (MOTOSHIKI)

印刷: シモダ印刷

発行: 熊本市現代美術館 www.camk.jp

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3

電話 096-278-7500 FAX 096-359-7892

【次号は春号(4月発行予定)】

ART DE GYAN アート・どぎやん

熊本弁で「アートはどぎやん?」
という意味です

山口輝也作品展

熊本県立美術館分館

熊本市中央区千葉城町2-18

096-351-8411

2018.4.24-5.6

約60年の画業を振り返る個性。「僕自身が見たくてね」と、山口さんは笑顔で語った。当館からも《うずくまる女》と《風景》を出品しており、前後の時代の作品と比較することで発見が多くあった。三原色を基準とする意識は、海老原喜之助に指導を受けてよりずっと継続。「常識的でない表現」を常に目指し、現実の風景を抽象化させる具象/抽象の問題を常に意識してきたと語る。《風景》では「こ



メージがリアルに立ち上がった。きたのが興味深い体験だった。さらに、山口さんの作品ならではの表現として、ひとつの空間を別次元の空間で囲むこと、空間に区切りを付けることはリアリティを増す仕掛けであるとの言葉は、絵画での表現を追求した60年間を感じさせる内容だった。(H・T)

こが木で、地面で、畑でね...と、また他の作品も「青は樹木を象徴、影は濃い青で、日が当たると黄色に」と「と解き明かされると見ると風景の具象的なイメージがリアルに立ち上がった。きたのが興味深い体験だった。さらに、山口さんの作品ならではの表現として、ひとつの空間を別次元の空間で囲むこと、空間に区切りを付けることはリアリティを増す仕掛けであるとの言葉は、絵画での表現を追求した60年間を感じさせる内容だった。(H・T)

コダ・ヨーコ原画展 「どろぶつえんの どうぶつたち」

長崎次郎書店 (Gallery Jiro)

熊本市中央区新町4丁目1-19

096-3326-4480

2018.4.24-5.6

熊本市動物植物園の全面開園に向けて、イラストレーターのコダ・ヨーコさんが「解説パネル」のために描き下ろした作品の展示。
2016年の熊本地震によって、大きな被害を受けた熊本市動物植物園。本展開催時は土・日・祝日限定で一部のエリアを開園していた。それまで経験したことのない大きな揺れに底知れぬ不安やストレスを感じたのは、人間だけでなく、動物たちも同じであろう。いや、もしかすると人間以上に不穏な空気を察知している



かもしれない。それでも動物たちは、職員の方々の懸命なケアと、その動物本来の強たくましい生命力によって、今日も生きています。
展示空間に入った瞬間、まるで温かくて優しい肌触りの布にくるまれたような心地になった。描かれている動物たちの表情には愛嬌があり、今にも「ねえ、ねえ」と喋りかけてきそうな様子に思わず笑顔がこぼれる。早く動物たちに会いたい。そのときにこの絵が傍にあったならば、きつともっと楽しい気持ちになるだろう、と感じた。(K・M)

アンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介します

Visitor's letter

渚・諭・カーテン チェルフィッチュの〈映像演劇〉

■「現代美術館」の名にふさわしい内容で、「今」を生きている実感が持てました。スマートフォン等で製作できるのが、見るだけの立場を脱する事ができるので希望が持てます。

■4歳、8歳の子連れで来ました。「映像演劇」なるものがどんなものか想像つかず、子供には難しいかと心配していましたが、2人ともじっと見ていました。子供は子供なりに感じる事があったようです。現実と虚構のさかい目がゆらぐ不思議な体験ができた感じで、大人の私ももちろん楽しめました。

■少し変わった展覧会だと思いましたが、自分もその作品の一部となれるような感じがし、楽しめました!!

蜷川実花展 一虚構と現実の間にー

■光と闇のコントラストによって非日常に誘われ日々のけんそうを忘れてゆっくりした時間を過ごせました。

■色の鮮やかさ、別世界のような会場内の雰囲気圧倒されました。くると日常を離れた感覚になれます。3回きました。

■1つ1つの作品が工夫されていて、インパクトがあり印象に残るものが多くあった。

蜷川実花展—虚構と現実の間に—



的な感性、そして蜷川さん個人の気持ち、ゾーンとに蜷川さんの様々な「いま」と作品の魅力が、まさに体感できる展覧会でした。総入場者数42,619名、写真の個展としては当館No.1記録となりました！(H・T)



2018.6.30

オープニングアーティストトーク

蜷川実花展オープニングアーティストトーク「作品への想いから、仕事の仕方、子育てまで。蜷川実花が、みなさんからの質問にお答えします。」を開催しました。事前抽選に当選された160名の皆さんから寄せられた質問より抜粋した22件について、Q & A方式でお答えいただきました。



「バイブル的な1冊は？」という質問には、小学生の時に父から手渡されたという藤原信也「メメント・モリ」を紹介、「好きな花は？」という質問には「桜です。毎年春になると撮影しています」など、寄せられた質問や相談にひとつひとつ親身にお答えいただきました。蜷川さんが作品集を作るまでの手順や、制作中の映画の話など、なかなか他では聞くチャンスのないお話しも飛び出しました。「楽しいことを増やす」「ほんのちよっと勇気を出す」など、蜷川さん

が日々心掛けていることが、質問者・相談者への励ましの言葉となり、会場全体が、明るく前向きなムードになるのを感じました。(H・T)

【参加人数160人】

2018.9.10

サマープレミアムナイトツアー

サマープレミアムナイトツアーは、閉館30分前から始まり、担当学芸員による30分間のレクチャー後、閉館後の展示室内を貸し切り状態で1時間鑑賞できるイベントです。今回のレクチャーは、鑑賞のヒントをお伝えすることを目的に構成しました。当館と蜷川実花さんの出会いは、「花・風景展」(2009)で、当時の展示会場でも体験型展示が行われましたが、本展の特徴として、床にもシート貼りされて没入感が高いこと、「イメージonイメージ」の展示方法を紹介しました。また、アーティストトークで発言されたキーワードとして「四谷シモン・寿サブロー・リカちゃん」「横尾忠則」、映画「サンタ・サングレ」「エルトポ」がそれぞれどのような作家・作風であるかを紹介、蜷川作品との共通点を探りました。特に、藤原新也「メメント・



モリ」からは、造花の供花、死者に捧げるマリーゴールド、生と死の距離の近さなど、少なからずの影響を受けているのでは、と考察しました。また、ポートレート作品については、瀬戸内寂聴さん、羽生結弦選手撮影時の蜷川さんのエピソードを紹介、蜷川さんがポートレート撮影時に用いる4つの方法なども紹介しました。

アンケートには、作品の背景を知ることさらに深く鑑賞を楽しめたという感想が多く寄せられました。今後も「プレミアムナイトツアー」は定期的に開催していきたいと考えています。(H・T) 【参加人数37人】

2018.8.18

「親子で挑戦!」フォトフレームづくりワークショップ



蜷川展の関連イベント「フォトフレームづくり」を開催。15組の親子にご参加いただきました。今回のワークショップはフレームに入れた飾りたい写真を当日お持ちいただき、その写真に合うフォトフレームを作る企画です。持ってきた写真の良いところ、面白いところ、好きなところ、思い出、想像する物語などを紙に書き出し、イメージを膨らませ、飾り付ける素材を選びます。制作に取り掛かると皆さんすごい集中力で、あっという間に制作が進み、世界に一つだけのフォトフレームが完

成。最後は、何人かのお友達に作品の発表をしていただきました。(A・T)

【参加人数15組】

2018.8.19

大人プログラム「セットアップ体験」



蜷川展の関連イベントとして、セットアップ体験を開催しました。前半はアーティストの今田淳子さんによる制作のワークショップ、後半は写真家の宮井正樹さんによる撮影ワークショップという贅沢な内容です。制作ワークショップでは、大きめの箱の中に各自お持ちいただいた雑誌の切り抜きや写真などと、美術館が用意した材料を組み合わせ、箱の中にミニチュアのセットを制作します。工夫次第で奥行きができ、箱の中に素敵な空間が生まれました。完成後、写真家の宮井さんが作品に合ったライティングをセット。撮影のコツを聞きながら作品のベストな角度を探し、撮影を行いました。実物もさることながら、撮影すると作品の魅力がより引き出されます。

今回、大人向けワークショップとして、高校生から60代までの方々に幅広く参加いただきましたが、大満足というご感想を多数いただき、スタッフもうれしい気持ちになったワークショップでした。(A・T)

【参加人数11人】

【参加人数11人】